平成26年（2014）5月13日発行

再発見！兎原住吉、昔を未来へ
住吉歴史資料館

第８号

住吉歴史資料館だより

資料館だより 第8号目次

住吉のまちかど
呉田区本住吉神社御旅所
……1ページ

阪神淡路大震災
住吉の記録をまとめ、それを活用すること
住吉歴史資料館事業推進委員会
……2ページ

住吉の学校3校合同のお茶会及び展示「遺跡から見る住吉の災害展」
住吉歴史資料館事業推進委員
前田康三……3～4ページ

吉田区のだんじり
住吉歴史資料館事業推進委員
内田雅夫……5～7ページ

赤塚山からの眺望
神戸大学地域連携センター研究員
住吉歴史資料館専門委員
木村修二……8～11ページ

住吉のまちかど

住吉の南、呉田区にある本住吉神社御旅所です。かつては海岸の砂浜がすぐ近くでした。

本住吉神社例大祭では御鳳輦の渡御がここまで行われ、宮入では住吉のだんじり7台が勢ぞろいして出発するのもここからです。

御旅筋から見て、鳥居と松の木、大燈籠越しに「御鳳輦請け」の玉垣が見えます。松は住吉ゆかりの木です。

この大燈籠には、「寛政十二年庚申六月吉日　浪華住　高木武倫」と読める文字が彫られており、大坂の高木という人が西暦1800年に寄進したものです。非常に大きなもので、なぜ大坂からわざわざこの御旅所にとの疑問がわきます。

大坂の住吉大社の宮司は代々津守家が勤めておられました。津守家にはその一門に「神主七家」という大社を守り立てるべき家々があり、高木家もその一つです（太田亮『姓氏家系大辞典』）。「高木武倫さん」が、その神主七家の高木家ゆかりのひとかどうかはわかりません。

江戸時代中ごろ、高木武倫という人が、大坂の大社でなく兎原住吉の本住吉神社に、それも境内でなく御旅所に、このような大燈籠を寄進していることは本住吉神社の御鎮座沿革を考える上で示唆に富みます。

住吉歴史資料館ご案内

再発見！菟原住吉、昔を未来へ

開館の目的は、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい。住吉歴史資料館は文化・歴史的の面からそれをお手伝いする。」ことです。

そのため、以下を行います。

1. 本住吉神社横田宮司家に伝わる古文書の整理。
   関係文書、記念物、言い伝えの収集。
2. 展示物のメンテ。
   展示室、座敷を使用しての各種展示の企画。
3. やさしい、楽しいイベントを企画して
   みんなの地域への理解を深める。
4. 「住吉歴史資料館だより」を通しての広報。
   成果の発表。

●住吉歴史資料館の刊行物●

1. 本住吉神社詳誌　平成22年5月刊
2. 兎原だんじり本　平成13年刊　在庫なし
3. 住吉歴史年表　平成19年刊
4. 住吉歴史資料館だより創刊号　在庫なし
5. 住吉歴史資料館だより第2号
6. 住吉歴史資料館だより第3号　在庫なし
7. 住吉歴史資料館だより第4号
8. 住吉歴史資料館だより第5号
9. 住吉歴史資料館だより第6号
10. 住吉歴史資料館だより第7号
11. 住吉歴史資料館だより第8号
12. 住吉歴史資料館だより臨時増刊
    住吉谷の水車展
    （平成22年秋イベントの冊子資料）

お願い

広くみなさまからの情報、資料のご提供をお願い致します。

1．各町協議会の古い記録類、書類。旧青年団、警防団の旗 など。
2．各お家に伝わる古い書類、絵図、古文書 など。
3．各お家に残っている、農耕具、或いは、馬や牛が牽引する荷車（いわゆる“馬力”）の道具類などの労働具。
4．古い写真（近所、町内、住吉村、武庫郡、神戸 など）、小学校の卒業アルバム、卒業証書。
5．災害時の記録や写真。（阪神大水害、阪神大震災、昭和42年水害 など）
6．戦時中ののぼり、腕章、たすき、或いはバッジ、記念品など。
7．だんじり、住吉祭の写真。（渡御、宮入、宮出し など）

また、長年住吉に住んでおられる方々に気軽にむかし話をしていただいております。“ああ、あの人なら、住吉のこと“よお知ってはる”、という方をご紹介下さい。

編集後記

来年１月17日は阪神淡路大震災からまる20年となります。改めて自然災害の凄さを思い亡くなった方に哀悼の意を表します。資料館では平成24年以来、被災当時の聞き取りを進めており、来年初めには、聞き取り資料集の第１号としてまとめます。ここではその内容主旨を掲載しました。まだまだ生々しいものであり印刷公刊はせずに、資料館でデータとして持ち、防災の必要に応じ、関係の皆さまに配布し役立てて頂こうと思っています。お茶会は年々保護者の方にも参加頂いています。都会の真ん中にこんな静かな座敷と庭があることに皆さん驚かれます。今年も元気な児童生徒の写真を掲載しました。吉田区のだんじりについては、昨年貴重な写真が発見されそれに基づき昭和30年当時のお祭りの宵宮を再現してみました。木村先生には明治末の赤塚山からの眺望写真に基づき住吉村の風景の解説をして頂きました。あの時代にタイムスリップする機会を頂き興奮します。今では想像もつかない広々とした風景の中に石屋川の土手、御影師範学校の立派な建物、今も残る香雪美術館の洋館、本住吉神社の大きな森、小林墓地の野望堂も田園の中の風景として写っております。　（M.U.記）

■資料館の開館日は毎週木曜日の午前中です。
　また、別途、日曜日は展示室を開館しています。（世話人会の委員の方がお世話）
■資料館の座敷ではお茶会が「菟原茶華道会」主宰で開催されます。
　本年は、5月11日、7月13日、9月14日、11月9日の各日曜日です。

住吉歴史資料館　本住吉神社内御本殿西　〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町7丁目1-2　fax専用078-201-3738　メールアドレス shiryoukan@iris.eonet.ne.jp

阪神淡路大震災 住吉の記録をまとめ それを活用すること

住吉歴史資料館事業推進委員会

平成27年1月17日で阪神淡路大震災は20周年を迎えます。

住吉歴史資料館では、住吉の人々の20年前の記憶を記録し、そのなかから教訓を引き出し、防災のために生かすことは出来ないかと平成24年より震災聞き取り調査を行っています。

神戸大学地域連携センターの指導で、住吉に住む人たちがどのように災害に対処していったのかを残して行こうとする事業です。すでに8名(のべ9名)の方々に聞き取りを実施しました。

来年3月をめどに「阪神淡路大震災資料集(I)」としてまとめようと思っています。

資料集(I)は、平成24年7月19日と平成24年9月13日に行った聞き取り調査で、避難所となった神戸市立住吉中学校とJR住吉駅の西にある浄土宗阿弥陀寺での様子をまとめたものです。

聞き取りを通じて分かってきたのですが、震災の復旧復興に向けて、やはり住吉ならではの特徴が出ています。

1 かつての水車の水路を利用した。

水道は断水したが住吉の地理的な特徴である六甲山の南斜面とその中を流れる住吉川からとりいれた旧村内の用水路を活用して水を確保し、水洗トイレなど生活用水に利用した。ぎりぎりのライフラインは維持できた。

2 太平洋戦争の空襲の体験を生かした。

昭和20年(1945)の空襲後、被災者が避難した小学校での実態、ありさまを実見した当時の小学生であった人がその体験を思い出し、住吉中学校の避難所でそれを生かした取り組みを行った。特にトイレの始末を速やかにルール化した。

3 旧村以来の寺院が避難所開放した。神社も被災者救護を行った。

昭和13年大水害でいちはやく避難所として境内を開放した歴史を持つ浄土宗常住山阿弥陀寺が今回の大震災でもそれにならい、直ちに境内を被災者に開放する決断をされた。

鎮座千八百年と言われ旧村以来の崇敬を集める本住吉神社では、社殿、鳥居、石燈籠などほぼ全壊の状況のなか社務所大広間で被災者怪我人の救護をされた。この様子は資料集(II)以降で記述する。

4 青年団、町内自治会の行動が的確迅速であった。

住吉村時代から現代にまで続く青年団、町内会の組織やその活動が生きており、避難所の維持運営、支援物資の取得などにつき、身体の末端組織細胞のような血の通った活動をおこなった。

住吉は、昭和40年半ばまでは、1小学校、1中学校の学区であり、町内では、××××ちゃん、yyyyちゃんと呼び合う子供仲間が、若いときにはだんじりを引き、大人になり町内の役員をつとめ、地理も人も体で知っておりツーカーで迅速に動けた。

しかし、それだけにその行動は外部の人、特に新来の住民の被災者には見えにくかった。

5 あたりまえのことをしただけのこと。

これらの地元生え抜きの人たちは、町内のため、地域のために純粋に動いた行為が殆んどであり、聞き取りで、これらの行動を掘り起こすまでは表に出ず、このまま忘れられようとしていた貴重な行動であった。

まとめると、これらは住吉に長年住んでいる人たちが過去の災害、戦禍である昭和13年阪神大水害、太平洋戦争末期の昭和20年空襲などの教訓を忘れずに、また、旧村時代からの地元組織、地縁、血縁を最大限に生かし、新旧住民が一体となり大震災の復興に生かしたという点に特徴があります。つまり、神戸市東灘区住吉という都市化された市街地での災害でしたが、神戸市合併以前の兵庫県武庫郡住吉村以来の住民が地元の地理、歴史を実際に災害復旧に生かしたという点に特徴があります。

そして、住吉村役場と神戸市合併後は財団法人住吉学園が住吉の人たちの求心力になって常にバックアップして来た体制があることがもう一つの大きな特徴です。

これらの教訓は、神戸大学地域連携センターによる東北被災地復興支援の活動のなかで紹介されています。

資料集は地元住吉の貴重な記録であり、資料集(II)、或いは資料集(III)としてまとめて行きます。併せて、聞き取り調査を地道に継続し新たな教訓を探って行きます。

現在、現実のものとして想定されている南海トラフ地震対策へのヒント、あるいは復興への努力が続く東北の人たちにも参考にしていただければと思っています。

住吉の学校3校合同のお茶会及び展示「遺跡から見る住吉の災害展」

住吉歴史資料館事業推進委員　前田 康三

平成25年11月30日(土)に恒例の住吉小学校・渦が森小学校・住吉中学校の合同お茶会が住吉歴史資料館の座敷で開催されました。その後、イベント「遺跡から見る住吉の災害展」、および住吉学園制作の尚歯会第百回記念DVD映像『我がこころのふるさと住吉』を見ました。合計で約90名の児童・生徒・先生方及び保護者の方が参加されました。

お茶会開催にあたっては毎年「本住吉神社世話人会」のご支援と、茶事のご指導及び準備は「菟原茶華道会」の皆さまにお世話になっております。

お茶会でのアンケート内容を紹介します。

《小学校》

・昔はいろんな災害がおきて、住吉にも古墳とかがいっぱいあったんだなーと思いました。(小6女子)

・私が生まれる前に災害が次々起こっているのが分かって、おどろいた。(小6女子)

・住吉にこれほど遺跡があるのは知りませんでしたので大変勉強になりました。(小6女子)

・遺跡などから地震がわかるなんてすごいと思った。(小5男子)

《中学校》

・今では考えられないほど住吉の昔はひどい災害があったなんて知しりませんでした。(中1男子)

・住吉には何度も災害がおそっていたけれど、地域とのつながりの深い住吉だからこそ乗り越えられたのだと思います。(中2女子)

●住吉小学校の児童さん

●渦が森小学校の児童さん

●住吉中学校の生徒さん

みんな正座して…

飯塚校長先生には任期中最後のお茶会でした。

「わがこころの住吉」上映中です。

参加の皆さんは全員お茶会は楽しいもので、作法・茶道具・茶室・歴史についてもっと深く知りたいというご意見でした。

住吉歴史資料館が本住吉神社の中にあることについては、54.5％の方が知らなかったと回答されており、まだまだ、PR活動が必要なことがわかりました。

写真と災害展資料をご紹介致します。

遺跡から見る住吉の災害年表

平成25年11月30日
住吉歴史資料館

年代	遺跡	地震や洪水	どこに書いてあるか
5世紀末～ 6世紀中ごろ 《古墳時代》	住吉宮町遺跡、郡家遺跡	たびたび、大規模な地震が発生し、直後に洪水にみまわれたりした。 洪水→洪水→地震・洪水→大洪水が5世紀末から6世紀はじめの50年の間に繰り返された。	郡家遺跡第83次 発掘調査報告書
	住吉宮町遺跡	洪水がおこり、1号墳～5号墳は埋まってしまったが、古墳の上の部分は残って、頭を出していたようだ。7号墳～9号墳はその後で造られた。	住吉宮町遺跡第24次・第32次 発掘調査報告書
	住吉東古墳	この地方を治めていた有力な人が亡くなった。この人のお葬式をするために古墳の上にお宮のような祭壇を作り、おまつりをしようとしていたときに、住吉川に大洪水が来て、そのまま流されてしまった。	住吉宮町遺跡第9次 発掘調査報告書
6世紀末 《古墳時代》	住吉宮町遺跡、郡家遺跡	大洪水で住吉、御影の水田のすべてが埋まってしまう。これまでのたび重なる災害にもちこたえた集落もこの大洪水で壊滅的な被害を受ける。	郡家遺跡第83次 発掘調査報告書
1596年9月5日 （文禄五年閏七月十三日） 子刻 （真夜中の12時） 《安土桃山時代》	住吉宮町遺跡、郡家遺跡 西求女塚古墳	Ｍ８クラスの巨大な地震が京都に発生した。慶長伏見地震という。住吉にも大きな被害を出したことが遺跡や記録でわかる。住吉宮町遺跡では、当時の地面から約1.5メートルの深さを境にして、上側の地盤が横に２メートル近く滑り動いて、井戸の上半分が折れ曲がった跡が見つかっている。西求女塚古墳では石室がずれて割れてしまった。本住吉神社の記録：「豊公朝鮮出兵のとき神殿鳴動する」	住吉宮町遺跡第24次・第32次 発掘調査報告書、 西求女塚古墳発掘調査報告書 本住吉神社誌
1938年（昭和13年）7月5日		阪神大水害。住吉川の堤が決壊し、住吉は土砂で埋まる。	

神戸は地震のない、おだやかなとても住み良いところとみんなが思ってきた。

しかし！！

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分52秒	阪神淡路大震災。M7.2 住吉は甚大な被害を受ける。

吉田区のだんじり

住吉歴史資料館事業推進委員　内田 雅夫

太平洋戦争の三度の空襲で住吉は大変な被害をうけました。村役場、本住吉神社をはじめ、町の八割が焼けてしまいました。豪華なだんじりも七台のうち四台が焼けてしまいました。吉田区のだんじりは、焼けずに残った貴重な文化財です。

だんじりは本住吉神社の祭礼「住吉祭」に引き出されます。五月五日には、住吉の七台とともに住吉川の東、庄内氏子地区の四台と合わせ、計十一台が宮入りします。

吉田区のだんじりは第三番目に宮入りします。宮本の西区、宮西の茶屋区に続き、宮東の吉田区の順番です。

吉田区のだんじりは、戦後ずっと祭礼に参加してきましたが、交通量の増大などで昭和三十四年（１９５９）を最後に引き出しが止まってしまいました。

昭和四十六年（１９７１）に本住吉神社境内で住吉の他のだんじりと共に一括保管するために十二年ぶりに引き出し、その後、昭和五十年（１９７５）に、引き出しが復活して以降ずっと参加しています。

吉田区のだんじりの言い伝え

吉田区のだんじりについては、古い言い伝えが残っています。その一つに、昭和四十六年（１９７１）、本住吉神社の宮司さんが、古い人たちに聞き取り調査をされたとき、明治二十七年（１８９４）生れの油口謙次さんというひとは次のように語っておられます。

吉田のだんじりは河内の方から買い入れて手を加えたもので、もとはその土地の親分とか言われていた人が乗っていたものだそうである。

頃のものです。太鼓は嘉永七年（１８５４）の文字が読めます。また、鉦については、裏に銘があり、「泉州板原村法蔵寺什物梵鐘代」、また、その反対側には「京大佛住　西村左近宗春作」とあります。現在の大阪府泉大津市板原にある浄土宗法蔵寺の仏具であったらしいことがわかります。「梵鐘」は、同寺の記録では、１７３４年～１７６５年に第十一代住職を勤めた人であるとのことです。在職が享保十九年～明和二年にあたりますので、江戸時代八代将軍吉宗～十代将軍家治の時代です（『平成二十三年度兎原だんじりかわら版』による）。

鉦　銘が入っている（左の写真）

また、「京大佛住　西村左近宗春作」は鉦の作者の銘で、京都の大仏殿（今の東山七条）あたりに住んでいた鋳物師らしいです。江戸中期から後期にかけて活躍した名匠だそうです（大阪府茨木市東福井の浄土宗阿威山大念寺のホームページによる）。

しかしながら、なぜ、泉大津のお寺の鉦が神戸の東灘区住吉の吉田区に残っているのかは残念ながらわかりません。

昭和三十年頃の吉田区だんじりの写真発見

昭和三十年代の本住吉神社の祭礼は、次のようなものでした。各地区にだんじり小屋があり、五月十二日に引き出され、その夜神社に宮入りし、一晩泊め置きました。翌日五月十三日の本宮では御鳳輦の渡御のあと、宮出しし、渡御のお供をした後、地元に帰り、夜十時ごろまで町内巡行、いわゆる「町引き」をして楽しむというものでした。

五月十二日には、まず、住吉の七台のだんじりは本住吉神社の鳥居前

だんじりのお囃子に使う太鼓や鉦も古いもので江戸時代中期から後期

現在でも、いまのだんじりは昭和六年頃（或いは昭和八年頃）に大阪府の東大阪から購入したとの言い伝えがあります。また、別のいいつたえでは、京都所司代会津藩主松平容保のお伴をして京都の侠客「会津の小鉄」が乗ったともいわれています。

に午後一時ごろ集合し、鳥居前から御旅筋を下り、お旅所に集結します。

今回三枚の写真が発見されました。写っている背景、撮影の推定時間帯、そして、写っている人たちの表情などから昭和三十年ごろの祭礼宵宮五月十二日の様子、並びに、そのころの住吉の風景がわかる貴重なものです。

写真1は、だんじり小屋から引き出され国道2号線の北側吉田会館前に東向き止まっている写真です。この後、国道をUターンし、国道2号線の南側を西向きに停止し、そのときに撮影したと思われるのが写真2です。鳥居前に、各だんじりが神社前に集まり、吉田区もその所定の位置で停車しているときのものでしょう。午後1時ごろです。吉田のだんじりの前後には国道に沿って、西側は空区、東側には茶屋区のだんじりが並んでいたはずです。

そして、写真3は、鳥居前に集合したあと、各だんじりがお旅筋を南に下り始め、吉田区も順番に従って下っている写真です。

吉田区だんじり　吉田会館前国道　《写真1》　手前は、国道電車の線路

ものはないものの平和な時代になり祭が復活した

まず、これらの写真を通してわかるのは、人々のうれしさが見てとれることです。太平洋戦争が終わって平和になり、お祭りでだんじりを出せるようになりました。だんじりを引く人の衣装が、戦前からのもの、ありあわせのもの、普段着そのものといろいろで、まだまだ、ものがないときでしたが、何か落ち着いた気分の時代であったことが伝わります。

写真1には、昭和十一年十二月九日に完成した吉田会館が写っています。現在の吉田会館と同じ場所です。吉田区のこのあたりは幸いにも空襲を受けず、会館完成当時は住吉村の各区会館のなかでも最も立派な会館であったと『住吉村誌』にあります。会館の北側のだんじり小屋も焼けずに、だんじりも焼け残りました。

国道2号線（阪神国道）には国道電車が走っていた

写真2では、阪神の国道電車が横を走っているのがわかります。国道2号線といっても、まだ、交通量が少なく、電車が走っていました。神社の前の国道にだんじりが時刻と順序を決めて勢ぞろいして並ぶことが、まだ出来た時代だったことがわかります。

この国道電車は、大阪の阪神野田駅から神戸脇浜までつながり、そこで神戸市電に接続されていました。余談ですが、神戸みなと祭では、線路がつながっているため市電の花電車が乗り入れ、東灘区まで走ってきていました。

国道に停車中。左側に阪神国道電車が通る。《写真2》

「お旅筋」、住吉の代表的な風景——今は失われてしまった

今はお旅筋といっても普通の道路ですが、明治になるまでは本住吉神社の馬場で、馬場先（ばばさき）と呼ばれていました。古い記録では、幅は四間半、鳥居前より海岸まで五百四拾九間とあり、これは幅8.23メートル、正面鳥居から海岸まで、約1,500メートルになります。海岸は砂浜で、神社の鳥居が立っていました。お旅筋の東側は獺川（うそがわ）の清流がさらさらとながれ、途中には、住吉神社と関係の深い大海神社がまつられていました。今のダイエーのところです。

明治時代までは、大海神社とともに、その北には、神功皇后がお姿を写されたという浅澤池や、神功皇后釣り竿の竹がありました。

これらの風景は、本住吉神社の鎮座伝承に因（ちな）み、六甲山の南、大阪湾にのぞむ住吉の素晴らしい風景の中心でもありました。大正二年（1913）発行の「阪神間名勝史」に「灘八景」という名所が紹介されていますが、馬場先の景色は「住吉の夕照」として選ばれています。

写真3では、その大海神社の森（神社は遷され、写真の当時は既に、個人の邸宅）、並びに、獺川の流れが写っています。松と清流の馬場先の風景がかすかに想像できる貴重な写真です。

吉田区だんじりお旅筋南行き　《写真3》　鳴尾御影線のあたり。後ろの森が、今はダイエーとなっている。

馬場先お旅筋明治中期1900

馬場先の現況、お旅筋ほぼダイエーの前

呉田浜に面した鳥居（馬場先道の終点、浜より北を望む）

吉田区のだんじりは、そんなお旅筋の風景の中、お旅所に向かっています。あと数時間もすると今度は宮入を行うために、提灯やぼんぼりに灯をともして、お旅筋を上ってくるのです。

大海神社は明治四十三年（1910）に住吉神社の境内に遷されました。大海神社は吉田区の守護神でもあり現在でも吉田区が住吉神社境内でおまつりをしています。

現在、獺川はふたをされ、森のところはダイエーとなり、風景は一変してしまっています。

新発見の写真とともに、昭和三十年ころの住吉祭と住吉の風景を振り返ってみました。

赤塚山からの眺望

神戸大学地域連携センター研究員・住吉歴史資料館専門委員　木村 修二

『資料館だより』第7号では、赤塚山が住吉村における信仰の聖地のような場所だったことを紹介しました。いまでも場所によってはいい眺めの場所もあるでしょうが、かつての赤塚山の山上からは南の海の方がひろく開けたたいへんすばらしい眺望が得られました。そのことを偲ばせてくれるまことに貴重な写真があります（写真1）（図1）。

この写真は明治四四年（一九一一）に発行された『御影の里』と題された風景写真集に掲載されている一枚です。写真に付けられたタイトルは「御影山より見たる御影町」とあり、住吉の隣の御影方面を遠望することがいちおう主題になっている写真ですが、実はこの写真は赤塚山の山上から撮影されたものであり、写真のかなりの部分に住吉村の領域が写っているのです。

まずこの写真が撮影された地点ですが、どうやら前号でふれたかつて（忠魂碑建立以前）の愛宕山地蔵尊のすぐそばではないかと考えられます。じつはこの写真には影になって見えにくいのですが、愛宕山地蔵尊の石祠（現在徳本寺境内にある石祠とは形がちがうようですが）とおぼしきものが写っています（①）。そのほか明治の末に発行された地形図の情報と画面に写っているものとを比較（図2）しても、赤塚山を視点としていたことが確認できます。たとえば、中央部やや上に横長の大きな建物が数棟建ちならんでいるのがみえます（②）が、これは現在の神戸大学発達科学部（旧教育学部）の前身である兵庫県御影師範学校です。その建物群の東南隅とその手前にみえる洋館（③、後述）とを繋いだ線上に撮影ポイントがあります。また同じように画面の右手海岸の所に短い棒状のもの（④）が見えますが、これは東明の走出というところにあった煙突（恐らく酒造場）ですが、これとその手前に見える上石屋の集落（⑤）の位置関係も撮影地点決定の決め手です。同じように画面左手の海岸近くの二本の煙突（⑥、呉田にあった酒造場）の位置関係の分析によっても同様の結果が得られ、撮影地点が赤塚山の山上部であることが判明しました。

撮影位置がほぼ特定できたことにより、写真に写っているものが何であるかがある程度推測が可能になりますが、なにぶん一〇〇年も前の風景ですから、現在とは景観が大きく異なっていることはいうまでもありません。しかし、なかには今でも残っている建物や風景が写っているのです。

その一つに、現在香雪美術館となっている朝日新聞創業者村山龍平旧邸の洋館があります。写真中央部の木の向こうに銅葺き寄せ棟造りの洋館の屋根が見えています（③）。この洋館は明治四二年に建てられたので、写真に写っているのは建築直後の洋館であるということになります（写真2）。旧村山邸のあったのは郡家村・住吉村の境目の郡家側なので、そこから左手一帯が住吉村ということになります。村山邸の東（左）隣には、いまはありませんが旧弘世邸（日本生命創業者）の屋根（⑦）が白く光っています。

もう一つ現存しているものは、小林墓地の北側に建つ「野望堂」です。小さくてわかりにくいですが、木立を背後にして白い壁の小さな建物がみえます（⑧）が、これが「野望堂」です。今は背後の木立はなくなり、壁も傷んでトタンが張られていますが、いくどかの取り壊しの危機を地元の方々の努力で克服し、今

写真1.「御影山より見たる御影町」(『御影の里』)

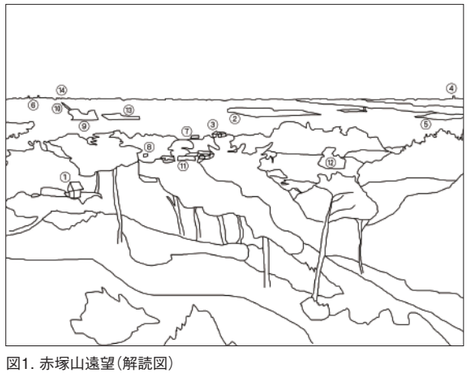

図1. 赤塚山遠望(解読図)

お宮の存在を示しており、良いランドマークだったと思います。神社の森から海に向かうように延びる直線の御旅筋（馬場先道）が見えます（⑩）。御旅筋の周囲にはまだ田んぼが多く残っており開けた景観だったことがわかります。

一方、今は失われてしまった景観もあります。④「野望堂」のすぐ右手に東西に長い屋根の建物が見えます（⑪）が、これは当時まだ残されていた山田地区内の水車場の建物です。そのさらに右手（海側）にも大きな屋根の建物が建ちならんでいますが、これらも水車場の建物でしょう。現在のような住宅地というよりも水車場が主だった山田地区の面影を偲ぶことができます。

また、そこからさらに右手、画面中央付近に畑がひろがる区画がみえますが、このあたりは現在の住吉山手二丁目および四丁目附近に相当します。いまではすっかり住宅地になってしまいましたが、明治の末はまだ畑がひろがっていたことがよくわかります。とりわけ注目したいのは、そのエリア内に何かこんもりとした小丘のようなものが見えます（⑫）。これは天保四年（一八三三）の年記のある絵図（「天保四年水掛り絵図」（神戸大学所蔵御影村文書））に描かれた一本松の立つ小丘と思われます（図3）。天保の絵図にはこの小丘の東側に「此所二水汲場所」と記されており、上流のほうから流れてくる水路と水たまりのようなものが描かれています。写真ではわかりにくいですが、少なくとも絵図に描かれたほどの大きさの水たまり状のものを確認することはできません。あるいは野井戸のようなものがあったのかもしれません。

本住吉神社の森の右手には、このころには住吉尋常高等小学校の校舎

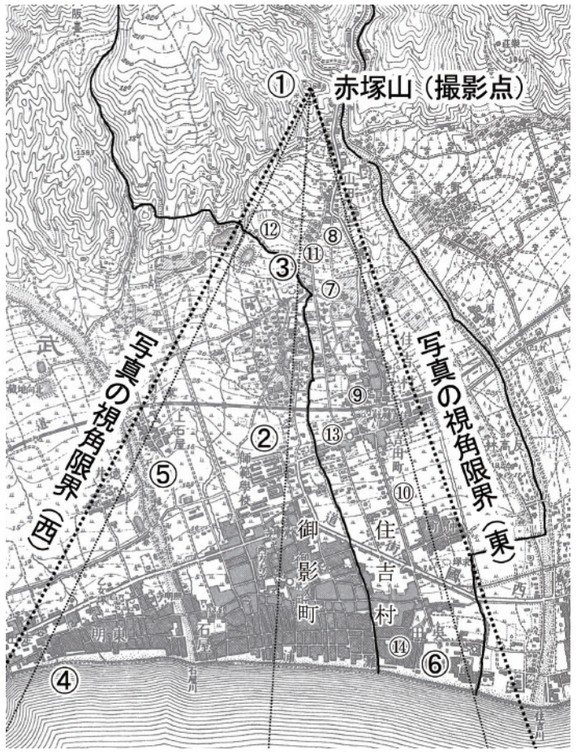

図2. 撮影地点の推定図（正式二万分一陸測図を加工）

写真2. 旧村山邸洋館（香雪美術館）外観

にその姿をとどめています（写真3）。『住吉村誌』にも記述がありますが、その他の地蔵尊の現状とともに別の機会に改めて触れることにしましょう。

画面左手の奥にやや霞んでいますが、こんもりとした森がみえます（⑨）。これは本住吉神社の森です。森の樹木が今よりもよく繁茂していたようで、さすがに社殿までは見えませんが、周囲に高い建物のなかった頃には、森の存在そのものが

写真3. 現在の野望堂

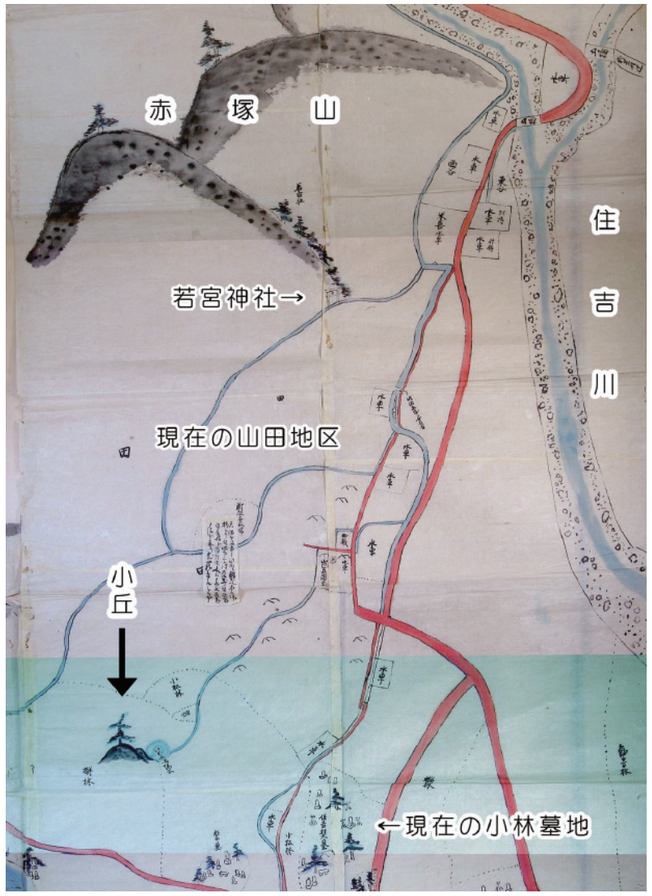

図3. 天保4年水掛り絵図（部分、神戸大学大学院人文学研究科古文書室所蔵）

があったはずですが、残念ながら霞がかっていてはっきりみることができません（⑬）。今の住吉小学校は、大正八年（一九一九）に移転・落成したものです。

御旅筋（馬場先道）の行き着く先には呉田の集落があります（⑭）が、その先はすぐに海です。現在は呉田の浜はなくなり、運河をへだてて住吉浜町の埋め立て地があり、さらに南に六甲アイランドが出来て、大阪湾もすっかり遠くなった印象です。

東方から太陽の光を受けるかたちで家々の瓦の屋根が光っていることから、朝の風景なのでしょう。煙が東か東南の方向へたなびいていますから、地上には西寄りの風が吹いているようです。撮影場所の地面には山の地肌が露出しており、禿げ山の名残も見受けられますが、あたりには荒れ地に強い松の木がずいぶん大きくなってきているのがうかがえます。視角から外れてしまって住吉川が見えていないのが残念ですが、右手上方にみえる石屋川のように、まだこのころの住吉川流域にも松の林が川に沿うように続いていたことでしょう。いずれにしても、実におだやかな風景ではありませんか。

住吉は、ほかの灘目の地域同様、この一〇〇年の間に大きく景観を変えました。それは宅地化や酒造業などの大規模化とそれに伴う人口の増加の影響が大きいでしょう。明治の半ば頃には三〇〇〇人代だった住吉村の人口は、この写真が撮られた明治四〇年代後半には五〇〇〇人代になり、大正から昭和にかけてさらに一万人以上も増え一八〇〇〇人ほどまでになりました（『住吉村誌』）。終戦後一時的に一〇〇〇〇人ぐらいにまで減りました（『続住吉村誌』）が、その後はまた増加してゆき、現在では約三八〇〇〇人にまで増えています（総務省統計局・二〇一〇年度国勢調査の人口統計による）。また、第二次世界大戦末期の大空襲による被害とその後の復興過程における町並みの変化などもあったはずです。最近では、平成七年（一九九五）の阪神淡路大震災後の再開発は、さらに大きな景観の変容をもたらしました。

失われた過去の景観を眼前に取り戻すことは不可能ですが、古い写真の中に偲ぶことは可能です。過去への小さな窓ともいえる古写真ができるだけ多く見いだされることが望まれます。